寄稿く

秋田と伊勢商人（前編）

金児　紘征

（秋田大学　名誉教授）

はじめに

私は三重県松阪市出身であるが、すでに秋田市に50年以上住んでいる。秋田大学に勤務していた当時は学生たちに「秋田では故郷を語れ、故郷では秋田を語れ」と勧め、自らもそのように心がけていた。ある時、たまたま秋田の歴史本で、手広く鉱山経営をして活躍した伊勢商人の伊多波武助（いたばぶすけ）のことを知り強い関心を持った。秋田の伊勢商人のことなら秋田でも伊勢でも共通の話題にできることに気付き、書物を読むだけでなく、両方に縁のある人物を自分でも調べてみようと思い立った。調査に時間がかかったが、2017年に拙著『秋田の中の伊勢』としてようやくまとめることができた。

本稿は２部構成で、今回の前編では江戸で活躍した伊勢商人のことを、次回の後編では秋田の伊勢商人の系譜について紹介する。折しも今年は三井家の始祖、三井高利（みついたかとし）の生誕400年にあたる記念の年であり、伊勢商人のことを振り返るよい機会だと思う。

伊勢商人の本拠地

伊勢商人とは、伊勢国（勢州：せいしゅう）と呼ばれた三重県の伊勢湾に面した地域出身の商人のことであるが、三都（江戸、大坂、京都）で活躍したことで有名である。伊勢商人の本拠地は松阪市周辺と、より小規模で北側に隣接した津市、その北の白子（しろこ）（鈴鹿市）である。伊勢商人というと伊勢神宮のある伊勢市から出た商人と思われがちだが、伊勢市は当時、山田と呼ばれており、商人は伊勢参り客相手の地場の商売が主で、他国にはあまり進出しなかった。

松阪市周辺では、松坂町、現在は松阪市に含まれる射和（いざわ）村、中万（ちゅうま）村、現在は多気町（たきちょう）に含まれる相可（おうか）村などがある。松阪の中心地は江戸時代、「松坂」と呼ばれていた。そこで、現在のことをいうには「松阪」、昔のことをいうには「松坂」と区別する。

江戸時代、伊勢参りは別として、他国への出入りは厳重に規制されていたが、江戸後期の松坂の文献『宝暦咄（ほうれきばな）し』によると、江戸店（だな）のある松坂商人は名前のわかった家だけで50家あった。松坂町は１万人程度の町で人口の１割は出国していたと推定される。なぜ他所より制約が少なく他国との交流が可能であったのか、それはこの地域における統治の形態と関係がある。

松坂は近江日野（滋賀県）出身の蒲生氏郷（がもうじさと）が12万石で入り天正16（1588）年に築城してできた町で、楽市楽座の自由市場を設けて商業の振興を図った。その後、御三家であった紀州徳川藩の領地になったが、藩主は和歌山在住で、松坂には転勤族の松坂城代が赴任した。紀州藩55万石のうち伊勢領は18万石、その内の伊勢松坂領は６万石、中間（ちゅうげん）を含めた武士は200名程度で、実質は有力な商人が町年寄に任命されて運営していた商人の町であった。江戸中期には、江戸への為替を送る江戸店持商人８家からなる「松坂御為替（おかわせ）組」が組織されて、紀州藩の公金

を扱うとともに、御用金が課せられていた。幕府公認の松坂銀札の発行元でもあった。

武士の子供も嫡子以外は職を求めて商人の江戸店で働くという例が多く、武士の奥方が町家の出ということも珍しくなかった。藩のお達しにも百石以下の武士について、嫡子以外は百姓、町人などにして、どんどん片付けるようにとあった。全体的に他所に比べると武士と町人の隔たりも少ないものだった。紀州藩主であった徳川吉宗が８代将軍になって、伊勢人が取り立てられる機会が増え、江戸に行きやすくなり、江戸店の伊勢商人にもさまざまな恩恵があったと思われる。鳥羽藩の飛び地であった射和は伊勢白粉の生産地で、有力町人により運営されていた。櫛田川を挟んで射和の対岸の相可は紀州藩伊勢田丸領６万石の領内で、関西方面から伊勢参りをする際の最後の宿場であった。北伊勢の白子は紀州藩伊勢白子領６万石の飛び地で、ここも伊勢商人の拠点であり、江戸への紀州藩米、伊勢木綿の積み出し港だった。

伊勢国図

江戸行きの船が遭難してロシアに行き着いた大黒屋光太夫（だいこくやこうだゆう）は白子の船頭で、紀州藩の年貢米と松坂の長谷川家の木綿などを運んでいた。松坂の北は32万石の藤堂藩の領地で、城下町の津も伊勢商人の拠点だった。松坂近郊は戦国時代には北畠氏の領地であったが、没落後の江戸時代になって、紀州藩、藤堂藩、鳥羽藩の領地が入り混じり、隣の家は他領というのも当たり前で、関所もなかった。他領との境界が明確に定められ、関所で区切られ厳重に出入りが管理されていた秋田領などとは統治の実態がかなり異なっていた。

伊勢商人の他国進出

地名のついた商人はいろいろあるが、多くはその地に住んだ地場商人で、商圏の広い江戸商人、大坂商人、京都商人などが有名である。

これに対し、伊勢商人は地場の伊勢ではなく、他国で活躍したことに特徴がある。伊勢の商圏が特に広かったわけでなく、彼らの新地開拓精神の賜物であり、これには歴史的背景がある。

古くは南北朝時代に北畠親房（きたばたけちかふさ）、顕家（あきいえ）父子が伊勢人を従え、東北地方を転戦して以来、伊勢人は東北地方に土地勘があったと思われる。その名残としては北畠氏の一族が津軽浪岡（青森県）に移住して浪岡氏を名乗ったことなどがある。

また、中世以来、伊勢御師（おんし）が各地をめぐり、伊勢神宮のお札を配り、伊勢参りをあっせんした。伊勢神宮に寄進された穀物の運搬、商品化などの仕事も担ったと思われ、次第に商人化していった。上杉謙信に仕えた御師の蔵田五郎左衛門が御用商人になった事例などがある。諸国の神領で収穫された米を運ぶ船を「大神宮神役船」と称したように、各地の住民にとって伊勢神宮を連想させる伊勢国は親近感の湧く土地であった。

西日本は古くから発達し、それに比べると東日本は商売の新開地であった。近江商人や伊勢商人はそこに狙いを定めた。江戸時代以前の上方から東国への海運は、海の荒れた太平洋側よ

り穏やかな日本海側の方が盛んであった。

敦賀湊（福井県）の資料によれば、日本海側の海運で敦賀から北国に茶を運んだきっかけは、天正17（1589）年、出羽地方に出店があった射和、相可商人から伊勢茶を運びたいという申し出があったことによる。北日本では茶を生産できず、大変な貴重品であった。本居宣長（もとおりのりなが）の随筆『玉勝間（たまかつま）』の中に、君が畑（滋賀県東近江市）の茶揉み歌として、「こゝでもむ茶が秋田へくだる、秋田女郎衆にふらりよかよ」とある。

櫛田川沿いの射和、相可の商人は徳川時代以前から活動していた。その上流に古代から水銀を発掘していた丹生（にゅう）があり、射和は水銀製の伊勢白粉を生産、販売することで発展した。

日本海に比べ太平洋は海が荒れることが多いが、操船に長けていた伊勢海賊衆はすでに中世には伊勢と東国の間で海上輸送を盛んに行っていた。船団を組んで物資を運び、それは「伊勢廻船」と呼ばれた。戦国時代末期には伊勢商人は各地の戦国大名と結びつき、物資を運んでいた。伊勢市大湊の角屋（かどや）家（後に松坂に移住）が、天正３（1575）年に徳川家康へ宛てた北条氏政の書状を海路で運んだことなどが知られている。この角屋家は天正10（1582）年、本能寺の変の際に、堺に滞在していた徳川家康の三河への逃避行の道中、白子から伊勢湾を渡るのを助けた功績で、行く先々の領主の許可なく湊へ自由に出入りしてよいという御朱印状を受けた。

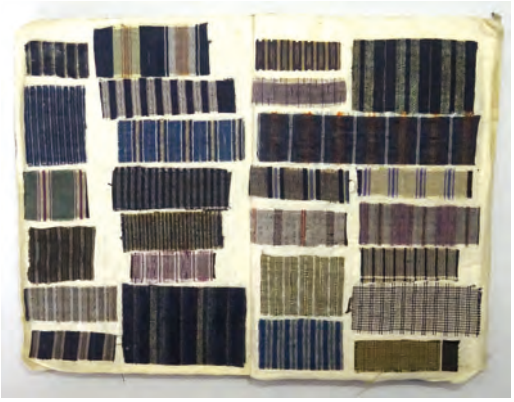
射和の富山（とみやま）家は天正13（1585）年に北条氏支配の小田原に進出して呉服を商いした。『小田原市史』には、最初の他郷商人は京都、伊勢から来たとある。富山家は、天正18（1590）年に北条氏が滅んだ後、徳川家康の江戸転封とともに率先して江戸に移住した。江戸に最も早く進出したのは伊勢商人だと思われるが、それ以前から東国に土地勘があったことが契機になった。

伊勢商人の江戸店

川柳に「江戸に多きもの　伊勢屋　稲荷に犬の糞」とあるのには、伊勢屋が多すぎてうっとうしいという感情が表れている。必ずしも伊勢出身者と限ったわけではなく、のれん分けで広がっていった。

伊勢は、全国一の木綿織りの特産地で、松坂木綿は最高級品とされていた。歴史的には５世紀後半、帰化人が機織りの技術を伊勢にもたらしたと言われており、今も御麻生薗（みおぞの）、上御糸（かみみいと）、下御糸（しもみいと）などの地名が残っており、木綿渡来以前の絹織に由来する神服織機殿（かんはとりはたどの）神社、麻織の神麻続機殿（かんおみはたどの）神社などもある

松坂木綿は「松坂縞（まつさかじま）（嶋）」と呼ばれる縦縞模様に特徴があり、この模様が江戸っ子に好まれ、「松坂嶋を着る」という言葉もある。伊勢商人は鎖国前に海外貿易をしていたため、東南アジアの縞模様がルーツではないかと推測されている。松坂商人の角屋七郎兵衛は安南（現在のベトナム）を拠点にし、寛永10（1633）年に鎖国令が出ても定住を決意して戻らなかった。



松坂木綿縞帳
安政4（1857）年「しまもめん」
（松阪木綿手織りセンター所蔵）

伊勢商人による江戸進出の始まりは先に述べた射和の富山家であり、元和元（1615）年から25年間の資産の増減を記録した「足利（たしり）帳」は日本最古の会計簿として知られている。

松坂商人の江戸進出の始まりは、当時の松坂第一の商人であった鈴木家（屋号伊豆蔵）であった。三井家始祖三井高利の兄、俊次は親戚である伊豆蔵の江戸店で奉公し、寛永４（1627）年に独立して小間物店を始めた。そして、高利は兄の店で修業し、一旦松坂に戻って金融業をしてから俊次の死後に満を持して江戸に再び出て三井越後屋を開いた。同様にして他の家の場合もつてを求めて、丁稚奉公をしてから次々に独立していった。

元禄時代頃までには伊勢商人は大挙して進出し、呉服商の大店が集まった大伝馬町の店はほとんどが伊勢商人であった。江戸で荷物の荷受けを行う問屋の組合が当初10組あり、「十組問屋」と呼ばれ、その組合に入らなければ荷受けができなかった。時代により浮き沈みがあるが、文政10（1827）年の十組木綿問屋「大伝馬町組」の名簿によれば、21家中15家が伊勢出身であり、うち松坂出身が10家である。まさしく大伝馬町は伊勢商人、中でも松坂商人の町であった。主な商家に松坂の長谷川家、小津家、長井家、津の川喜田家、田中家などがある。三井家は駿河町（日本橋室町の旧名）に店があったため、この中には入っていない。

伊勢商人は十組問屋の中に木綿問屋の他、茶、紙の問屋が多くあったのが特徴である。茶問屋は20家中12家が伊勢商人であった。北伊勢、南伊勢の山側に茶の大生産地があり、「伊勢茶」はブランドであった。江戸時代には静岡はまだ茶の生産地としては知られておらず、したがって駿河茶というブランドはない。『横浜市史』には、横浜港の開港時に率先してきたのは駿河商人と伊勢商人であると記されている。中でもいち早く進出したのは茶問屋の江戸店持伊勢商人であった。彼らは緑茶の海外貿易を大々的に行い、特に松坂出身の茶貿易商、大谷嘉兵衛はその貢献から「茶聖」などと呼ばれて尊敬された。静岡茶の振興にも貢献し、当地の関係者が静岡市清水山公園に彼の銅像を建立した。

当時、呉服商と両替商を兼ねる例が多く、多くの伊勢商人が関わった。江戸の金と大坂の銀の交換であるが、実際に輸送するわけではなく為替手形で決済した。三井家、射和の竹川家、相可の大和屋などは江戸と大坂で両替商を営み、大きな利益を得た。

現在まで日本橋近辺で残る伊勢商人と言えば、四日市出身の鰹節店舗「にんべん」、松坂出身の三井家の百貨店「三越」、紙商小津家の「小津和紙」、射和出身で国分家の食品総合卸「国分グループ本社」、中万出身の竹口家の「ちくま味噌」などがある。現在、最大の伊勢商人は「イオン」の創業家、四日市の岡田家である。

小津和紙（小津史料館提供）

倹約と勤勉

伊勢商人の神髄は倹約と勤勉である。「近江の辣腕　伊勢の始末」という川柳は近江商人と伊勢商人の特質を誤解なく評している。始末とは倹約のことで、無駄をなくすことである。近江商人はいわゆるやり手であり、伊勢商人は一にも二にも倹約である。川柳に「近江泥棒　伊勢乞食」がある。近江商人と伊勢商人の目立ちすぎに対する悪感情が感じられるが、近江商人は金に物を言わせて買い叩き、相手が売ったとい

うよりは盗られたと思うほどであるのに対し、伊勢商人は倹約が過ぎて、まるで乞食のように貧乏性であると思われていた。

「初鰹　伊勢屋の前を　素通りし」というものもある。何が面白くてあんなに倹約するのか、江戸っ子には全く理解できなかったのだろう。何も初物で高値の時に買わなくても、安くなってから買えばいいではないかというのが伊勢人気質である。倹約しないと後で後悔すると伊勢人は自らの振る舞いを納得していた。

倹約と言うか、合理的と言うのか、兄が亡くなるまで江戸店のあった町人育ちの本居宣長は、植木屋から桜の苗木を買うときに、半金払い、根付いたら後の半金を払うと記している。

体裁を気にせず、無駄な金は一切使わないという倹約の精神が徹底しており、「江戸っ子は宵越しの銭は持たない」の対極にあった。伊勢商人の特質として、さまざまなアイデア商法があったことが知られているが、実は工夫するのは大変難しいということは誰もが経験することである。工夫するのは努力しても難しい、ただし倹約なら誰でも努力すればできるだろうというのが信条であった。

そして、一時の利益を追うよりも、いかにして家を代々存続させるかを重視した。一攫千金で贅沢三昧というのが江戸時代初期の豪商のイメージであったが、三井高利は、勤勉こそが成功の道であると説くなど、紀州の紀伊国屋文左衛門の生き方の対極にあった。三井家では家訓で、巨利を得られるかもしれないが危険性の高い鉱山経営を明治時代になるまで禁止していた。伊勢商人の伊多波武助が秋田で鉱山経営をしたのは珍しい例と言える。三井家の３代目である三井高房は、松坂生まれの大番頭、中西宗助の助言で『町人考見録』を書いた。多くの没落した商家の事例を考察して、子孫への教訓とした。三井家の親戚筋にも辛辣で、射和の富山家の江戸店大黒屋が採算を度外視した大商いで借金がかさんでつぶれたことなども例示した。江戸前期の豪商の商売の流儀がだんだん時代に合わなくなっていた。

どこの家でも法度集を作成し、家族、手代、子供（年若い丁稚のこと）に戒めとした。その骨子は極端ともいえる倹約と勤勉の勧めであった。三井家法度には、次のようなものがある。「何人客がいても一人で接待すべきで、接待側の人数が多くなると酒の席が盛り上がって各人が勝手に注文してしまい、大変物入りになる」、「手代の親親戚は言うに及ばず、国元の者などにも一切掛け売りをしてはならない」などである。また、商売のできる者は新参、古参に関係なく引き立てるとも言っている。単なるお題目ではなく使用人を集めて読み上げられ、確かに聞きましたと捺印が必要だった。

商売の仕方

「人の気をくみて商いの上手は此国なり」井原西鶴が『日本永代蔵』で伊勢国を評した誉め言葉である。伊勢では伊勢参りの客に商いをする際、相手の言葉からさっと出身地を見極め、相手に合った売り方をしていると感服している。伊勢商人が他国に進出する際には、このように他国に土地勘があったのも有利に働いたことだろう。また井原西鶴は伊勢の流儀として、田舎で家を建て替えるとき、今年は誰々の家、来年は誰々の家と順に計画的に建て替えていき、人手のやりくり上手に感心している。江戸でも伊勢商人同士は地縁、血縁関係で協調していた。

伊勢商人は合理性とアイデアに長けていた。三井越後屋は「現金掛け値なし」を始めた。当時は店先で値段交渉をするのが普通であったが、「正札」をかけて値段を明示したのが画期的で

あり、他の店より安値にした薄利多売であった。また、当時の大手の木綿商は小口の店頭売りよりも、訪問販売によってまとめ買いしてくれる屋敷売りが主体の商いをしていた。木綿は反物にして売っていたため、使いきれずに無駄な買い物になっていた。そこで、切り売りを始め、店内に仕立て職人を置いて即座に仕立てることも始めた。面白いのは、店員同士が値段の打ち合わせを客に聞かれるのを警戒し、どの店でも符丁を使っていたことである。三井越後屋の符丁は、「伊勢松坂越氏」を数字にして、イ（一）セ（二）マ（三）ツ（四）サ（五）カ（六）エ（七）チ（八）ウ（九）シ（十）だった。

店員が伊勢に戻った時に本家にあいさつに行くが、土産で悩むことはなかった。店によって品物は異なるものの、初登り（現在とは逆に伊勢に帰ることを登りという）なら浅草海苔10枚というように土産は家訓で決まっていた。

本家の惣領息子も特別な扱いを受けずに育てるというのも伊勢流である。明治時代初期のことであるが、三重県に本店のある百五銀行を創業した津の川喜田久太夫（かわきたきゅうだゆう）家の16代目久太夫は、子供の頃丁稚と一緒に育ったため、呼び込みの発声がうまかったと述懐している。

伊勢商人の故郷へのこだわり

近江商人についても言えるが、伊勢商人は他国に進出しても故郷に対するこだわりが特別に強いのが特徴である。

川柳に「駿河町　ほぞの緒は皆伊勢にあり」というものがある。松坂出身の三井呉服店（現三越）は日本橋室町（旧駿河町）に今もある。そして伊勢商人の流儀として、ほとんどの店員が松坂近郊の出身であった。彼らは、初登り、二度登り、三度登り等で、７、８年ごとに伊勢に里帰りし、その都度伊勢の本家で職務の査定を受けて、良ければ継続、悪ければ解雇された。あらかじめ江戸店の支配人から査定状が送られていて、計算ができて商売向きかというような仕事上の能力とともに、家風に合うかどうかも重要視された。初雇は12、3歳で、長く勤めて30代後半で円満退職すると、退職金をもらって第二の人生を歩んだ。

三井越後屋店は500人規模の大型店であったため、早い段階で伊勢出身者だけでなく、他国者を採用せざるを得なくなったが、その他の伊勢商人は台所の賄人などは別として、商いを行う店員はすべて故郷の本家で採用していた。

本居宣長は、随筆『玉勝間』の中で、「松坂はことによき里にて、里のひろき事は山田につぎたれど、富る家おほく、江戸に店といふ物をかまえおきて、手代といふ物をおほくあらせて、あきなひせさせて、あるじは国にのみ居てあそびをり。うはべはさしもあらで、うちうちはいたくゆたかにおごりてわたる」と言っている。

江戸店がある家では、店は手代任せで主人は遊んでばかりと言っているが、遊興にふけっていたのでは店がつぶれるので、この遊びの意味は、余裕のある生活ぶりを称したものである。本居宣長の門人になる商人も多く、本居宣長はそのような主人たちの支援を受けていた。

大伝馬町の資料には、江戸店持伊勢商人は「勢州住宅ニ付き」と記されており、主人は伊勢に居て江戸店を遠隔経営するという伊勢商人独特の流儀があった。驚いたことに小津家、長谷川家などは、草創期を過ぎると、松坂では江戸の出店などの管理運営が主体で商売そのものをほとんどしなくなっていた。

本居宣長の言にあるように、うわべは大した金持ちに見えないというか見せないが、内実は豊かな生活をしているというのが流儀だった。今でも金持ちが金持ちのそぶりを見せないこと

が美徳とされている。本居宣長の養子であった本居大平（おおひら）は、紀州藩に召し抱えられて松坂から和歌山城下に移住して国学を教えた。彼は１千石以上の大身と松坂の江戸店持商人の暮らし振りが同程度で、500石以下ではとても風雅を楽しむどころではないと言っている。

三井家は商売の拡大により、本拠地を松坂から京都に移したが、三井高利の長男高平による『宗竺（そうじく）遺書』では、重大な困難が生じたときには一族郎党を勢州に引きあげるようにと子孫に伝えていた。射和の国分家は江戸店が300年以上になるが、いまだに本籍は故郷にある。中万の竹口家の江戸店「ちくま味噌」も300年以上になるが、今も故郷の家と行き来している。

伊勢商人と伊勢参り

江戸時代には今では想像できないほど伊勢参りが憧れだった。当地に伊勢出身者がいれば、「伊勢はどのようなところか」、「どのように旅をすればよいか」など、伊勢参りに関する諸々の情報を得ることができ、重宝された。また、各地に進出した伊勢商人は伊勢参りの便宜を図った。幕末に全国を旅し、北海道探検家として知られる松浦武四郎は松阪市郊外の生まれであるが、伊勢出身であると名乗ると大歓迎されたと述べている。毎年、各地の檀家をめぐり伊勢と行き来した伊勢御師も尊敬され、土産に伊勢暦、鰹節、伊勢白粉などを持参して喜ばれた。各地の事情に通じ、伊勢とのつなぎ役で伊勢参りをあっせんしたため、伊勢参りをしたい人にとっては安心して頼れる存在であった。

各地に伊勢神宮の代参のための神社があり、神明社、伊勢社などと称す。伊勢商人にとっては故郷を偲ぶ拠り所で、関りも深かったと思われる。山形県鶴岡市の伊勢両宮では伊勢屋藤右衛門が伊勢神楽を広めた事例などがある。

伊勢商人の文化的貢献

伊勢商人の足跡を調べると、商売だけでなく、さまざまな文化的・社会的貢献をしていることがわかる。金銭的余裕から次第に金儲けばかりしていてはだめだという風潮が生まれた。

俳諧が盛んになり、元禄時代以前に北村季吟（きたむらきぎん）が松坂に１か月余り滞在して『伊勢紀行』を記すなど、京都との文化的交流が盛んであった。本居宣長が生まれ、全国から門人たちが集まり、松坂の商人たちも感化された。

本居宣長の門弟でもあった松坂の江戸店持商人、殿村佐五平（安守）は滝沢馬琴と親しく付き合い、馬琴の小説を批評した『犬夷（けんい）評判記』を書き、馬琴もそれを許容した。また、彼は江戸店へ行った際には平田篤胤（ひらたあつたね）と親交を深めた。本居春庭の門弟であった小津久足（おづひさたり）（小津与右衛門家六代目）は商売の傍ら、46点もの多くの紀行文を書いたことで知られ、最近脚光を浴びている。彼も殿村佐五平の紹介で滝沢馬琴、平田篤胤と親交があった。映画監督の小津安二郎は小津与右衛門家の東京店を預かる分家の子孫で、若い頃は松阪で過ごした。中万の竹口家の竹口直兄（なおえ）、養子信義（竹川竹斎（たけがわちくさい）実弟）父子は、佐藤信淵（さとうのぶひろ）の指導で上総君津郡久保田（千葉県袖ヶ浦市）の荒れ野を開墾した。竹口信義の海外交易記録『横浜の記』にあるように、ヘボン式ローマ字の創始者ヘボンとの交流もあった。

店に貢献した手代は別家として遇せられた。その中から何名かの著名人が出ている。長谷川家の手代別家に東畑家と丹羽家がある。東畑家の子孫、東畑精一は著名な農業経済学者で文化勲章を授与された。丹羽家の子孫、丹羽保次郎はファクシミリを発明した有名な電気工学者で文化勲章を授与された。丹羽保次郎の孫、丹羽誠氏は現在、横手市立病院の院長を務めている。

伊勢商人の特出すべき文化的貢献は書籍を集

めた書庫、また私設図書館を持ったことである。商人に学問はいらないと言われた時代であるが、風雅を楽しむことのできた豪商たちは本の価値を認めていた。

佐藤信淵を学問の師と仰いだ射和の竹川竹斎は蔵書を集めて住民にも利用できるようにと「射和文庫」を開設し、現在に至っている。蔵書家として知られた小津久足は「西荘文庫」を開いたが、蔵書は天理図書館などに引き取られて消滅した。津の川喜田久太夫家、13代目の政安も小津久足と親しくして、蔵書家で知られた。長谷川家は丹念に自家に関する商業資料を収集し、現在松阪市に譲渡され公開されている。三井家が集めた書物、資料の「三井文庫」、小津家の資料を展示した「小津史料館」が東京にある。

おわりに

松坂近郊の伊勢商人はその特異な商売の仕方で、大挙して江戸に進出して活躍した。そして現在まで続く店もいくつかある。伊勢商人の流儀の神髄は倹約と勤勉である。無駄な金は一切使わず、よく言えば合理主義、悪く言えばケチである。きわめて実利主義で体裁を構わない。秋田人の感覚とは随分違うと思われるかもしれない。しかし、なるほどと現在でも参考になることもあるかと思われる。近江商人に関する書物は多くあるが、それに比べ伊勢商人に関する書物は少なく、あまり知られていない。本稿は伊勢商人に関する簡単な紹介であるが、伊勢商人について少しでも関心を持っていただければ幸いである。

＜以下、来月号に続く＞

＜参考文献＞

（1）金児紘征『秋田の中の伊勢』（無明舎出版）（2017）

（2）『三重県史 資料編 近世４（上）』（1998）

（3）『松阪市史 第十一巻 資料編 近世（2）経済』（1983）

（4）畠清次「江戸時代における茶の生産と流通に関する一考察」『高燈籠』（日本海地誌調査研究会）（1999）

（5）田畑美穂『松阪もめん覚え書』（中日新聞本社）（1988）

（6）山崎宇治彦、北野重夫編『射和文化史』（1956）

（7）嶋田謙次『伊勢商人』（伊勢商人研究会）（1988）

（8）後藤隆之『伊勢商人の世界』（三重県良書出版会）（1990）

（9）大喜多甫文『伊勢商人と江戸店』（2017）

（10）吉永昭「伊勢商人の研究―近世前期における「富山家」の発展と構造」、『史学雑誌』71編（1962）

（11）中田易直『三井高利』（吉川弘文館）（1959）

（12）北島正元編『江戸商業と伊勢店―木綿問屋長谷川家の経営を中心として―』（吉川弘文館）（1962）

（13）林玲子『江戸問屋仲間の研究』（御茶の水書房）（1967）

（14）石田修大『日本橋で三百年』（国分株式会社）（2012）

（15）『小津330年のあゆみ』（株式会社小津商店）（1983）

（16）菅野和太郎『近江商人の研究』（有斐閣）（1966）

（17）末本国紀『近江商人』（中公新書）（2000）

（18）桜井祐吉『松阪文芸史』（夕刊三重新聞社）（1969）

（19）井上正和、吉田悦之『北村季吟『伊勢紀行』と黎明期の松坂文化』（2013）

（20）上野利三編『竹斎日記稿』全11巻（松阪大学地域社会研究所）（1991-1995）（注：文政９（1826）年から明治15年（1882）までの56年間の日記）

（21）菱岡憲司『小津久足の文事』（ぺりかん社）（2016）

（22）上野利三『幕末維新期伊勢商人の文化史的研究』（多賀出版）（2001）

（23）紺野浦二『大伝馬町』（1936）（紺野浦二は16代川喜田久太夫のペンネーム）

（24）大谷嘉兵衛翁頌徳会『大谷嘉兵衛翁伝』（1931）